

教養図書館・冬休み中の

長期貸出及び休館日のお知らせ

長期貸出

期間 12月15日(木)から
1月14日(土)まで

冊数 1人 3冊まで

休館日

年末 12月26日(月)から休館

年始 1月4日(水)まで休館

冬休み中の 学内他館の案内

①白金図書館

長期貸出 期間 12月8日(木)～1月12日(木)

冊数 1人 3冊まで

休館日 年末 12月26日(月)から休館

年始 1月4日(水)まで休館

②医学図書館

休館日 年末 12月29日(木)から休館
(12月28日は正午まで開館)

年始 1月3日(火)まで休館
{ 1月4日は5時まで開館
1月5日から7時まで開館 }

③衛生図書館

長期貸出 期間 12月12日(月)～1月14日(土)

冊数 制限なし

休館日 年末 12月27日(火)から休館

年始 1月7日(土)まで休館

ひとこと

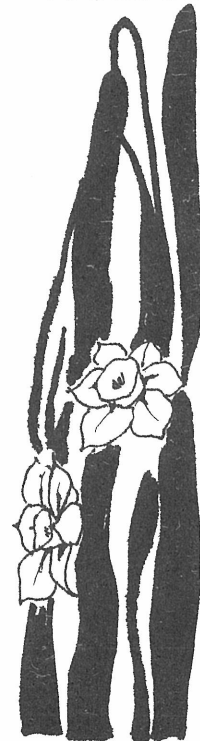
急な冷え込みで、このところコート姿が増えてきたようです。

そこで利用者の皆さんにひとこと。

図書館を利用する際は、カバン・袋類は持ち込む事ができません。大学から各自に与えられているロッカーにできるだけ入れるようにして下さい。図書館の入口にも、ロッカーはありますが鍵が使えません。

最近、図書館のロッカーで盗難があいついで起っています。利用の際に貴重品は入れないで下さい。

閲覧席を利用する場合には、コート着用もかまいませんが、書架の利用をする場合には、必ず書架入口のコートかけにかけてから入って下さい。



文学作品を読むこと

山根 和平 (哲学)

読書とか文学とかいう主題について縦横に論じ尽すなどという事は、私の柄にもないし、また今の場合適当であるとも思えませんので、ここでは、推薦図書として私が選んだ五冊の本に関わりがあると思われる二三の点を指摘するだけに止めたいと思います。

* * * * *

五冊の本はいずれも青年と現実の関わり合いをテーマとして選ばれています。ゲーテの『詩と真実』について「時代と歴史の諸要素と自己の天分と嗜好をになって、一人の少年が自己形成をしてゆく姿に、ひろく人間の生活と発展のさまが象徴されている……」（手塚富雄『ドイツ文学案内』岩波文庫）という説明は、多かれ少なかれ、五冊の本のすべてに当てはまるものと思いますが、特に『デヴィッド・カパーフィールド』では人生の悩み、『ジル・ブラス物語』では悪、『感情教育』では情熱、『ニルス・リイネ』ではニヒリズムとの関わり合いに注意しながら、読んでゆきたいと思います。どの作品も、それぞれの作家にとって深刻な経験であったに違いないのですが、「そうした作品の経験を再経験することによって、われわれは

心の中にはあるが、豊かで深い人生を新たに経験したことになる」（桑原武夫『文学入門』岩波新書）ので、この点に「文学作品を読むこと」の、単なる娯楽とは違った面白さがあるのでしょう。

このような再経験は私たちを未知の大きな世界へと導いてくれます。一つの作品から同じ作家の他の作品へと読み進む事ができればこの世界はますます拡大するでしょう。「ヴェルテルから『ノヴェレ』へ、初期の詩からファウスト第二部へ、それは何という道であろう！」（ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳『世界文学をどう読むか』新潮文庫）というヘッセの嘆声は、すぐれた作家のすべてに当てはまるものであらうと思います。しかし、こうして開かれる未知の世界は、単に私たちの知識を拡大するだけではありません。私たちは新しい世界を経験することによって、「自己解放」と「自己変革」を行なうことにもなるのです。（猪野謙二「読者の参与」岩波講座文学Ⅰ、Ⅳ）そこに「文学作品を読むこと」が私たちの人生にとって必要であると言えるとともに、文学の「こわさ」もあるように思います。

本と私

浦井 達夫 (物理)

旧制の中学を出て高校に入った頃から将来は自然科学（とくに物理学）を学びたいと漠然とした希望を持っていた。従って人生観、世界観（大げさな表現だが）も稍唯物的な傾向を持っていたように思う。しかし高校で周囲の影響を

受けそういう傾向にあきたりなさを感じた事、又人並に青年の悩みともいべきもののためかいろいろと本を読んでみた。その時最初に一つのショックを与えてくれたのが出隆著「哲学以前」であった。自然科学必ずしも万能ならず、

唯物史観は窮極のものにあらずという眼を開かれたように感じ「西田哲学」の存在を知った。必死に西田哲学に立向った。これは当時の世相の転換とも関連していると思っている。しかしどうやら理解し得たと思ったのは「善の研究」位で後は難解で歯が立たないものであった。しかし日本、日本人ということが深く心を捉えるようになった。和辻哲郎の「風土」はこの時深い感銘を与えた。人生には合理性の根底に非合理の深い深淵があるといったような感を持つようになった。たまたま当時日本は一路対アングロサクソンの戦につき進む前夜であった。丁度岩波新書が刊行されその2冊目に白柳秀湖の「世界諸民族経済戦夜話」が出た。国家の動きと正義

感との矛盾、正義感と国家への忠誠との間の相克に悩んでいた私には一つの救を与えてくれた。しかし結果は周知のとおり敗戦であった。戦前の価値観は転倒し、悉くが否定された。暗澹とした気持の時恩師竹山道雄先生の「時流に反して」を読み、とくにその中の「昭和の精神史」の章で自分の気持が本当に表現されているのを読み感動を受けた。これは若い諸君にも是非読んでほしいと思っている。河出書房から出た渡辺慧著「時」東京図書の同著「時間の歴史」この二冊は、上記のような考えを自然科学（物理学）を深くつきつめることによって根底づけるものと思う。以上は私の推薦図書についての感想である。

「研究者の良心」

島田孝右（英語）

大学で教えることになったのが、大学院博士課程一年生、24才の時であった。それまで修士論文用に毎日、イギリスの小説を300頁ほど読んでいたので、大学生より知識はあるだろうと思っていたので、授業中の質問はこわくなかった。しかし、この様なある目的のために本を読むことは、苦痛であっても楽しいはずはない。何故そうなのか。それは、研究のための読書は、研究者の良心を問うものであるからである。受験用の勉強が苦痛であるのに表面的には似ているが、もっと深い意味で、苦痛なのである。研究の意味にも関係している。研究書から、その著者の心を読みとれる様になれば、少なくとも研究者として資格があると言える。大学教師が読書から学ぶことができるのは、この良心である。人格とか教養とかは第二義的な重要性があるだけであって、本を何か人間的成長の目的で読むとすれば、この良心は消滅してしまう。例へば、聖書を読む場合を考えてみよう。普通、

信者は聖書を疑ってかかる態度を捨てている。まず信じているから。研究者は、この真理そのものであるはずの本を疑って研究を始める。様々な視点から問題点を追求していかなければならない。その過程で、果してこの聖書という本が、真理そのものであるのか考えがまとまってくるのである。この過程が実に大切なのである。研究者の良心がためされるところで、自分が主観的に真理であると結論を下すのでは研究者とは言えない。調査の結果、聖書の研究書が100冊あったと知っていて、99冊読んで、残りの1冊を読まずに結論を書いた時に、良心は消えてしまっている。又、もし研究者が、聖書を信者の心で読もうとする時に、聖書は人格の向上のためになくてはならない本となるが、研究者としての役にはたたなくなる。大学教師が、研究者なのか教育者なのかの議論は、ここから始まっていく。24才以来の自問である。

新書コーナーの新着図書

新書コーナーに新しく購入された図書を紹介します。ご利用下さい。

<中公新書>

- 「詭弁論理学」野崎昭弘 No.448
 「第3世界の歩み」西川 潤 No.450
 「ひとり旅の楽しみ」高坂知英著 No.451
 「プライドー現代人の精神医学ー」
 安食正夫著 No.457
 「道化の文学ールネッサンスの栄光ー」
 高橋康也著 No.458
 「新幹線事故」柳田邦男 No.461
 「おやじの国史とむすこの日本史」
 福田紀一著 No.464
 「邪馬台国ー入墨とポンチョと卑弥呼」
 大林太良著 No.466
 「ダーウィン論ー土着思想からのレジスタンスー」
 今西錦司著 No.479
 「中国人の論理学ー諸子百家から毛沢東までー」
 加地伸行著 No.480
 「無意識の構造」河合隼雄著 No.481
 「倭国ー東アジア世界の中でー」岡田英弘著
 No.482
 「香料の道ー鼻と舌西東ー」山田憲太郎著
 No.483
 「大衆消毒社会の終焉」犬田充著 No.484

<岩波新書>

- 「アンゴラ解放戦争」芝生瑞和著 No.953
 「ニーチェの顔」氷上英廣著 No.954
 「日本の地方自治」辻 清明著 No.957
 「韓国の経済」隅谷三喜男著 No.959
 「時間ーその哲学的考察ー」滝浦静雄著
 No.960
 「ある映画監督ー溝口健二と日本映画」
 新藤兼人著 No.962
 「記憶のメカニズム」高木貞敬著 No.965

- 「チョーサーの世界」榎井迪夫著 No.966
 「重いくびきの下でーブラジル農民解放闘争ー」
 F・ジュリアン著 No.967
 「狭山裁判」上・下 野間宏著 No.968 a, b
 「クールベ」坂崎垣著, No.969
 「物質理論の探求ーニュートンからドレートンまでー」
 島尾永康著 No.970
 「日本国家の形成」山尾幸久著 No.黄版13
 「日本人の死生観」下 加藤周一 No.黄版16
 「治安維持法」潮見俊隆 No.黄版22
 「新・ガンの知識」R・J・C・ンス著 No.黄版23
 「エピクテートスーストア哲学入門ー」
 鹿野治助著 No.黄版24
 「河上肇詩注」一海知義著 No.黄版25
 「彗星の話」富田弘一郎著 No.黄版26

<講談社現代新書>

- 「行動は進化するか」K・ローレンツ著 No.418
 「記憶力」岩原信九郎著 No.443
 「中央アジアの歴史ー草原とオアシスの世界ー」
 間野英二著 No.458
 「西アジアの歴史ー聖書とコーランー」
 小玉新次郎著 No.459
 「「遊び」の文化人類学」青柳まちこ著 No.476
 「スペインーフランコの40年ー」J・ソペーニャ著
 No.479
 「英語の語源」渡辺昇一著 No.480
 「イースター島の謎」A・コンドラトフ著 No.481

